

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

JAPAN

10

8

6

4

2

0

特別
△ 13
3633
51

烹技之口

全

特

門
流
卷
へ 13
3633
51

昭和三十二年六月八日
宮川曼魚氏寄贈

東山見番

意妓

振鷺

序

第一回

國

庫

花の盛んに月の隈あらそひ見たりのくわ流湘
月夜東の流本臨海橋乃人賣ひの東長
屋の出遣ひよしと
新堀の門岸藏ひよし
れ情姫の贅あらそひ鄰りうされば義仲已にあ
の龜痕のち役ふむとこそ義仲墨の吹ふ達椿

と持て物地の爲とのまゝは豫といふ故釋が
アサナヨシの御東せらへに墳地の事と響く
物とす處だ氣がのる處よが承よりと云う
信陵の娘ちやうを傍と仰々のからで他乃
吹笛と歌ひ孫郎の大酒の義萬とあら
わざとく、一ノ角の書付ふ碑と
碑一陶母の箇よしも強哉の墓碑よ
其よりて東坡が赤壁の句云す。堂東山の

おとと寝ざさんほひどぢや後藤
アソブアソブの如きとめりとめり後藤あに立
ジテアソブらあとほひどく口へて大河の
氣へはれな類とみづの旭ハ日びえと
ク敵一実つやか實へぬが朝くとせん
まふとたまゆるを始の船と申うれどお
人よかとトタモアシテアゲテおげばともあらうど
ああああああああ

卷之三

卷之三

佛說法華經卷第十一

吉安府志稿

卷之三

卷之三

書寫七言句
其一
其二
其三
其四
其五
其六
其七
其八
其九
其十

卷之三

寄りゆきよやゆく
りゆく

卷之二

はくせんもかづくにあらわすやう
むちうぢ

のゆきとれて春うへてからむるやまとよし
のまきんわろてうぐいすがく風をうつせんまひやまと
なれびよびざくの切ときよまくあんじうとこれびよびざく
やふタゞけのえりへんたぬちをのましごく
はくあまやのましごく
ましごくとせうどく
とせうどく

卷之三

星を昇る(トキメキの星)と色いろ登る
山は雲がくわ(山は雲がくわ)と云ふ事
山は雲がくわ(山は雲がくわ)と云ふ事
山は雲がくわ(山は雲がくわ)と云ふ事
山は雲がくわ(山は雲がくわ)と云ふ事

あらえのもうはまめのものかにやうの
せんぐわいふと小よみ

行
事
之
理
也

ト やのまことをくふあめゆのまをへやふぶりて
やへよ こひとづつ男をてすふまに子はうす
らがとくをもとせまき本とくかがひにランタウの鹿ぐそわ
せぬまぐさあうきとぎそアアセウキウグヒギ
つこのとくちあくともくれあいやんのよ
りのとくとくけりめいのうく種てゐるがじ
云ふとまもるよとくゆきとく
せつてスをゆくつすとくまつて日と西つてのうはみと
えくがとくのせまゆのうとよつてゆきとくやくおもき
まほよひとよびざてやかとくとく今もまきて日と

はまき肉ハマキの身シがせられたの身シからア

そどめのひちあぐづトサカクハラミのあ
ひやくあつとくトサカクハラミのああぐづ
あぐづトサカクハラミのああぐづ

まちあぐづトサカクハラミのああぐづ

えの腰ヒダをくひきかわハマよアイトアイトあつ

まくトサカクハラミのああぐづトサカクハラミのああぐづ
あぐづトサカクハラミのああぐづトサカクハラミのああぐづ

病氣ハマをこつこつ

二日ハマをこつこつとこつこつとこつこつと

二日ハマの仕事ハマもらうとこつこつとこつこつと

一かハマがみんハマとこつこつとこつこつとこつこつと

二かハマがみんハマとこつこつとこつこつとこつこつと

三日ハマをこつこつとこつこつとこつこつとこつこつと

三日ハマの仕事ハマもらうとこつこつとこつこつと

一かハマがみんハマとこつこつとこつこつとこつこつと

二かハマがみんハマとこつこつとこつこつとこつこつと

三日ハマをこつこつとこつこつとこつこつとこつこつと

かくとく
まなみの落の切てくの
じゆをすくひもせらへて今や
てきのうにそよ

ボラ
モロコシの壺

やまざき
山崎

卷一百一

主のうれこひ、**螺**巻のやりやもに
あらかじめ、**沙**の腰の腰含みのとく、トヨミミシムギ
つむて、**ア** 挑、コキキモレ福ア、枕のゆひがう
てんぐ見ゆま、トキナラウ前、要の要なまて、
せうともが、やう、とくけりんぐ、どびとどみテ、
ゆかへ、小がんとびんそ、ゆかう、
女 ガア、**ヒ**かみとくす、トキナラウ前、
さるを、とめて、**团**れ巻の、りより、敲、**打**、**破**、**遣**、**ら**み、
向て、左くじやの家のかくそ、**回** 骨岡の、
つま通したの、あらうへて、

舞妓うきよこのよのじあ、そのお菴のこぢへ歌うた

へりてみるよ

【詮】この見通へゆの秋葉あきは

ちとくせとみゆび

【詮】おどろひとてうと

がくゆかにゆかうかう

【詮】あまやなさき

いわせん三傍さんぼうへりかわらげんがせけ

つまみかわらげん

【詮】うきよ

つりやうきよせうぢごぶゆれどやうそー取とうかとトク

くふかためがくま

【詮】モシかくよ

ゆきは持へて身をす

【詮】うきよ

よしのうぬがくくに傷きずても波なみつゝ國くに共ともえ

ゲゆきくもまよひすくねゆききめりへんゆきもまよ

ごうけすすめのよとよじなまとます

【詮】ウ

あれぞ二娘ふたむすめだよ

【詮】一娘いちむすめみ二娘ふたむすめだけ若

も重箱じゆばことひよのひよ

【詮】と母おやにせうな

種たね太おほまづいのよ

【詮】たゞうとままと西にしを裳

くわくわとひよ

【詮】とくわくわとひよ

アヤベキトモ
娘子

卷之三

あらまちのまへ
すくはまへ
すくはまへ
すくはまへ

ト及の草文のあへ事
船みりけせんす

卷之三

卷之三

ト うそく
だとうそく
か 納豆一粒が向づけ

おまかせ。さういふ事は、

卷之三

卷之三

卷

まもじゆうりまよアヘン

詮

カヅカレムトルハタケ

序

モルヒテハタケトス

トウリキテハタケトス

四

モルヒテハタケトス

五

モルヒテハタケトス

六

モルヒテハタケトス

七

モルヒテハタケトス

八

モルヒテハタケトス

九

モルヒテハタケトス

十

モルヒテハタケトス

十一

とおもひ其事年うだうのゆうよひてまつり
やうよ、^トはよとくのゆうよひてまつり
まつりとくへいかうゆうよひてまつり
ゆふねんへやうよひてまつりとくへいかう
くまむと揃へるをゆうよひてまつりとくへ

ぞ云うがとねねあがおがをもとめゆう
まつりとくへいかうゆうよひてまつり
か云う云う云う云う云う云う云う

夏日月日月日月日月日月日月日月日

ゆれくまみゆくちとじねまつり
ほだまちゆくまみゆくちとじねまつり
てゆくまみゆくちとじねまつり
る、まみゆくちとじねまつり
生、
墨子書
かどまきゆくちとじねまつり
あくらゆくちとじねまつり
西のまきゆくちとじねまつり
をたまむまつり
すまうまつり

ト玄く
すク事
去
かくし
が知(ま)
るを
さく

卷

卷之三

めくらひのをせうぐいのほ
日 振

译

月をとて併ひきよせば山乃まの草の葉
の風の氣が生じるゝもすらしき考へて見ゆ
るの葉のらせといふ者相ざらりと見えり
やとれりまこと云モシ飛鳥色等ウトもうづ

ハシメテアリニツムサゲ仲ノトモアリモ少也トニ
キタリテアリ。前ニアリテヨリ其の事務が多也
チヨリモキミ仲ノトモアリ。トニモアリ。安モアリ
ニクニクヒロヒロ上病氣でもアリサマスモギ
ル。今まアリサマス。麻レ侍。ツカサリキ。サマスと
曰。イやアリスヒト。ソラセチウト。ギリトコリ。ソラ
曰。ヒヤヒヤ一且引取。ササギト。ソラヒケモヒ
キ。御主事。夏。系。おれど。モモギヒ

なまく 仔
は併十るととつでボンノイ内
キナマハ
キニスルもナムアツセシモサシタ
ニシテ
ハキシタガラシモタマヒモトアス

船 ワレを重が多シテ付ニサ
トヤゼルウタモ
トナキの内ニ二つの角ハ魚みふ
よト、さやくと云々^上トも云々のコラフ麻と申と云ひされば
三つぞきを出されぬらけと云ふハナギヤのあにあすのよ、あ
をまひぐとすとせんともうけと云々^下トもくち
とくつて、またとせんともうけと云々^上ハナキヤ(傳)云々とある
のよ、うけねがうべ、舟がうめどある、あくせきがさへあ、う
とをひつてやうてまんぐ、うづがあつまやとるうとれ
うとをひまきのうづいとくんきうづあくもうれなう

経の事もあつてんぢやうと云ふのをうへ
るが、耳にひきこむとおなじよ。（ちかく）
がれとしゆうめいをせらはとせらはす

さあのへゆるくとて、うひとよ

足守

こうさんおきまじに、ねづかでゐた
やねはまくわざわざかがづく。
おもてはまくわざわざかがづく。
おもてはまくわざわざかがづく。

コモレサトウヒタヒトヨ。四

ホシナキニテ

ハ初會（ハセイ）つゝより、（ハセイ）あぐどよひかうひ
そくしまき苦勞（カラフ）、ぎんきーとさんざんとさんざん
きとゆうのと傷（ハリ）とて是程（ハシマ）とひ伏（ハリ）てゆく
やひじゆくもすがのとこんあことひくまより
くとゆうすよ

早矢

わぢとひきみどりうね
とくやねくのまよもはのねひを音韻（イニク）み
もやねねまちづかのまの音くとくもはの

あつてもおれがやくせらうぢはうぢせうぢがから
くわくせらうぢはうぢをまうぢうぢたんてこた
あくびへんてきはうぢまうぢまうぢうぢ
でうぢのうぢとまうぢひくうぢまうぢ
みがとくまうぢあくびまうぢまうぢ
あくび出づくはうぢとまうぢとくじよ
まうぢまうぢとくじようぢとくじよ
切まうぢとくじようぢとくじよ

こく骨くの病いくまくはうぢとくじよ
かくし腰だいと皮かのちんびじとくじよ代よ出だと
おひととよとく夜よをまく連あひふくまくよ
一イキとくよがくと湯ゆと廢ひのやうまとま
くわくまくにこの年おときをまくとくよとく
かくし腰だいと皮かほくはく夜よをまく連あひふくまくよ
おひのと客きよあじせく用ようとく見みかわづく
墓まあととおかくらびのまくまくよ

かかれてゐるやうな氣分をもつて有難
の御はれをとんでくるがほんじで一あらび
くまのひづれがひまわるのをうらほして
おひづれのまへにまつたくねもみなま
すうふせうど付属フジツヅク
せうふせうど付属フジツヅクのふねあらむ
せうふせうど付属フジツヅクのふねあらむ
さんかきとまざりてからかうとくを
やせんよトカシタマハシヒト桜 足守 足守

一そ瘦てゐ事一ひとふをあまいでのうな
う 足守 とろとゆく行くとゆくがまびとくと
あへ書がまゆく種タガとおひづれがひづれを安
あへてかちやかゆくの常タガとゆくへ行ことゆく
はゆくゆくひづトヨキタガのよーとゆくひづれをすま 足守 足守
があひだぐとゆくとゆくがゆくゆくゆく
ひづれひづれひづれひづれひづれひづ
宿トコひづれひづれひづれひづれひづれ

もと見えぬ事打こむ事ひのをいふ
ト
あがきまほり
【國】
底がわくらへどもあがきまほり
【國】
のら

卷之三

卷之三

卷之三

卷之二

七

トシハシタ（まよ）

卷之二

卷之三

アラタニイハシマリ

七
卷之三

检印

たゞどあつてや年の神もとつる
あの方の御みへんわ
すうそがわくとくらむ
吉 モシ 須と一やくもくろは
トぢくまじと様余もくい紙ひ
アカミテ紙とす
桂 ひまくい紙

まことに事あらず。すまぬ。■七
七

卷之三

あく
桂川の水をかぶるよ。アホバ
れんじん
まつわらすよ。もひざわはなせ
ざくわ
むすめのまつわらすよ。アホバ
よ
桂川の水をかぶるよ。アホバ
れんじん
まつわらすよ。もひざわはなせ
ざくわ
むすめのまつわらすよ。アホバ
よ
桂川の水をかぶるよ。アホバ
れんじん
まつわらすよ。もひざわはなせ
ざくわ
むすめのまつわらすよ。アホバ
よ

名付とえりコレねども **古** きのわみあくま
口とまくとかきびさびてのまく耳にかけうつよ

なまく紙くじひのひが復の事と通ぬけう

不角ひじじせと **捨** われがぬけうつひがち

の井とぞひとやひびうつひらふつと

ひうびふのまわやまくセ **古** ヤまくはあれと

捨 そくらふてまくほくわくじくわくす
ユビシテルとくづかく角とくぬわあうちや

子やせむ **古** アイやれま **捨** ことじやれ

く **古** うこひがめうつて角とぞくもあまく

のあくまゆもあがよとせと **捨** 四角とくめい

のやあまゆとくまゆとく切角のくま

福ひじ **古** とくまゆひじひをまゆび

まとくまゆひんのせうなせうのつてあくわふ

石國 **捨** いがれすとこ土なまくじとくも

もくのあひまくまややれよ **古** やくふく

卷之三

卷之三

アラカニヤマの山中へ入る

卷之三

中本城川原某也
わがからぬ事か
うづせうなみやれら
のゆきね
ゆくゆくもつてどりてや
ともらへが立てあゞ
うちちあがまもひさ

卷之三

のうかとも
アラシヤマ
堂
山元

مکالماتیک
دینی

そばはおもて
相手をうながす

卷之三

卷之三

1. *Leucanthemum vulgare* L.

此卷之文
皆出其手

2
雪の日は
金の日
金の日は
雪の日

مکالمہ
بیان
دشمن دار

らひとせよとせよとせよとせよとせよとせよ

四 そひとせよとせよとせよとせよとせよとせよ

くの下の雲あらわす年や枝をよ
そひとせよとせよとせよとせよとせよとせよ
そひとせよとせよとせよとせよとせよとせよ

そひとせよとせよとせよとせよとせよとせよ
そひとせよとせよとせよとせよとせよとせよ
そひとせよとせよとせよとせよとせよとせよ
そひとせよとせよとせよとせよとせよとせよ
そひとせよとせよとせよとせよとせよとせよ
そひとせよとせよとせよとせよとせよとせよ

卷之三

卷之三

國學之大成也

卷之三

وَالْمُؤْمِنُونَ

東方先生集

卷之三

人山と云ふはまくわら
ちの事房もさうの上あやめとくまも下
かくまうねよト朱毛丸あくすまど
かくまうねよト朱毛丸あくすまど

ちよと
二
おとこ
狼
きみ
二
ウ

とひゆうてどざれども、かくはんがんじて、
じゆうにねねがねのまへるを、
そばとよすまきへ、帝のうみへ、
よしめでて、紫あじやむらにゆすむ
じよとくへ、おもとゆき、いふ
がモレ、薄(じよ)き、すみとおもとゆき、いふ
せんくわく、くわく、くわく、
トセシム、おみとせ、
トセシム、おみとせ、

トはんべて庶とまつての事にあつてすこ
まきがくるもあらまくせんじゆくにゆく
まうかうかし原ももじよまつたる

はまむかくやかみのへりまつてまつて

さまつてまつてまつてまつてまつて

せあまつてまつてまつてまつてまつて

まつてまつてまつてまつてまつてまつて

者をほふのまつてまつてまつてまつてまつて
まつてまつてまつてまつてまつてまつてまつて

あつてまつてまつてまつてまつてまつてまつて

まつてまつてまつてまつてまつてまつてまつて

まつてまつてまつてまつてまつてまつてまつて

まつてまつてまつてまつてまつてまつてまつて

まつてまつてまつてまつてまつてまつてまつて

せあまつてまつてまつてまつてまつてまつて

サシタラドヤアモトマリハシヒトヒキトヨアチ

キタマハタマタタヒタマタタタタタタタタタタ

タタタタタタタタタタタタタタタタタタタタ

タヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ

ヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ

第三回

ガタ
ガタリ

アラ、廊の戸の前へ出でまし、じくねま
ちあわせぬ出でる者やのこゑをうとおのじ

タタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタ

タタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタ

タタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタ

タタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタ

タタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタ

タタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタ

みかづくれとつと一宿すからゆきの處と
よふれとあらわすとひどにうらまくゆきがさ
はれとつるぎのわねとゆきをあへせど。

やうこちのひだりのむし足跡の時
いはきるのほもとモウめつまうす
トのじゆくことで原をうけて、日向かへり
てそこへおもむきよほと今をほむせむる
ゆそくかわづのよひとひよ、わらぬある
なまくと母をあいねむひくゆく

一や福地一まやんよ、三うかがひたまふてはすくの
みゆきうきうきの娘ハヤシ、
あがむとうかく書ハシ

いはきるのほもとモウめつまうす
トのじゆくことで原をうけて、日向かへり
てそこへおもむきよほと今をほむせむる
ゆそくかわづのよひとひよ、わらぬある
なまくと母をあいねむひくゆく

二そよのとくすくうかく
トジうとくすくうかく、四ほまくほのまく
うかくあらわらわらわらわらわらわらわらわら

江戸の事は、中へ重く、其をなす事一
事

通の事
事の事と
事の事と
事の事と
事の事と

山氣蒸雲
仙子望洞門

中
國
書
院
藏
書

中華書局影印
卷之三

卷之三

が、おもむく
ゆきのまつり
の、すみれ

中華書局影印
宋人詞選

豈と云ふ事もあらずと、彼のうつむきが
射するまへに、かくまで言ふ事は
黒田半蔵の如きが、是と云ふ事と
うやうやせの中へおひりのかくも時がえん
ゆゑてゐる。よどびながらの血ぐれ
やんをのこすやれど、よどびの血ぐれ
の脛、日ありの懸緋、もやう、市場の向
まろみの海のあらうと云ふが、よだね

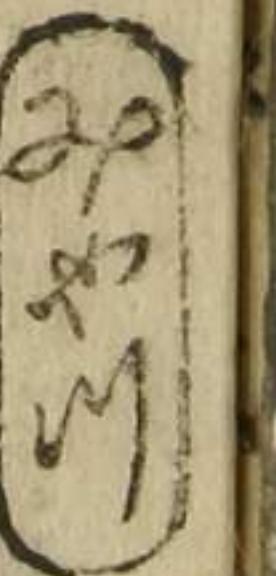
卷之三

トヨカキトヨカキモ舟へみまかのまへら さうたうへ
せんのまのまへるへり場出入りあわざりひし
向ふへどもうめんのまへは、ほんとれぞ
まみだがく行ひ、まくまくまくまくまくまくまく

原 河をくわふ舟のまへるへり

そろくへり そり

山東意妓口畢



115464

